

はリンク

はWAMNETの事業者情報にリンク

事業所名

笠岡市炉端の家

日付 平成 21年 3月 31日
特定非営利活動法人

評価機関名 ライフサポート

評価調査員 在宅介護経験15年

評価調査員 介護支援専門員経験5年

自主評価結果を見る

評価項目の内容を見る

事業者のコメントを見る(改善状況のコメントがあります!)

1. 評価結果の概要

講評

全体を通して(特に良いと思われる点など)

「食事」を広辞苑で見ると「生存に必要な栄養分を摂る為に、毎日の習慣として物を食べる事、又その食物」とある。食事を楽しむという事は、食事を作る過程と食事をする時間全体の中で作る楽しみ、食べる楽しみ、その間のコミュニケーション等を総合した生活であり、人と人との交流等、仲間作りにも役立っている。

このホームは草分け時代に笠岡市が作り、13年目を迎えているグループホームである。このホームで長く生活していた利用者(現在81歳)が、ある市民病院で大腸の手術を受けた。入院中に病院で嚥下の検査をした結果、「もう食べられない」と判断が下って、「胃ろうにしないと3ヶ月位の寿命」と家族やホームの関係者に告げた。主介護者の息子さんは仕事で米国に行っているの、病院の状況や利用者の状態等、色々な情報を詳しくメールで送り、息子さんと意見や情報交換をしていた。ホームからはしょっちゅう病院を訪問して、患者(利用者)さんの様子を見ており、唇を指で触れると「ごくん」と飲み込む様な仕草を見せた。管理者は「これなら食べられる可能性がある」と感じたそうだ。きのこエスポール病院の院長が主治医でもあるので、管理者は院長に「ホームに帰って食べられるようにしたい」と相談したが、医者立場からすると、手術した医師と同様「生命を守る 栄養分を摂る 胃ろう」は致し方ないとの判断をしたそうだ。それでも納得出来ないグループホームは「薬でもない、胃ろうでもない、人間の力、利用者に対する愛情で、生きて欲しいという職員の気持ちで、食べられるようにしたい」との気持ちを持ち続け、院長も説得した。やがて家族はお母さんのこれからを決める為に米国から帰国した。家族も胃ろうにする事を覚悟していたようだった。胃ろうにすると、このホームには帰れない。もう決断をする為の期間は2週間に迫っていた。医者は命を救う為には胃ろう処置、つまり栄養分補給のみを考える。ホームの職員は生活を楽しめる為に、口から食べるという。両者の挟間に立った時だった。院長と息子さんと話した結果「炉端の家に帰る」という院長の言葉だった。院長もホームの職員の熱意に賭けた瞬間であったろう。そして本人にも「炉端に帰るから」と伝え、家族と一緒にこのホームに再び帰れた。「お母さん、元気になってね」と言って息子さんは米国に帰った。ホームでは職員全員で一つの気持ちになって、食べる為のケアが続き、家族とはメールで状況報告している。この様子は記録を見るとよく理解出来る。やがて35kgの体重が45kgにまで回復した。院長も毎日の状態を連絡するようにと気にかけて頂いていて、急変時にはすぐ対応できるよう管理者が様子を聞いていたが、最終的には落ち着きを確認して安心したそうだ。「グループホームだから出来たんだ」と言われ、勿論家族も大喜びで、後に息子さん家族4人で来訪された。グループホームの介護職員及びケアによって人間関係改善も著しい事例である。

特に改善の余地があると思われる点

利用者も職員も明るく笑顔の多いホームである。利用者が一日のうち短時間でも良いから、しっかりと語る(論理的でなくても良い)機会を持てる様、具体的な話題提供をして、コミュニケーションのきっかけ作りをもっとして欲しいと感じた。

2. 評価結果 (詳細)

I 運営理念

番号	項目	できている	要改善
1	理念の具体化、実現及び共有		
記述項目	グループホームとしてめざしているものは何か		
記述回答	<p>1、自主評価について…：笠岡市も現在ほきのごグループに運営を委託しているが、利用料も安価に抑え、現場のケアだけ十分にしようとこの考えで、13年間をかけて安定した利用者及び職員を大切にしている。</p> <p>2、全体的に見て…：ホームでは毎年理念を基に「全職員で相談して年度目標を立てている。今年の目標は“お年寄り・家族・スタッフ一人ひとり、皆の思いに耳を傾け、受け止めて大切に”だ。そして3ヶ月毎に全員で検証して期間目標を立てて見直し、達成に努めている。12～3月期の目標は“今この瞬間を大切にしよう・思ったらすぐ行動・笑顔あふれる炉端の家”になった。この目標は炉端の家10周年の時の目標だった。ハードルを上げ過ぎず、しっかりと足元を固めて、利用者と共に今を生きようとする強い意志の表れである。</p>		

II 生活空間づくり

番号	項目	できている	要改善
2	家庭的な共用空間作り		
3	入居者一人ひとりに合わせた居室の空間づくり		
4	建物の外回りや空間の活用		
5	場所間違い等の防止策		
記述項目	入居者が落ち着いて生活できるような場づくりとして取り組んでいるものは何か		
記述回答	<p>1、自主評価について…：リビングルームを中心に一昨年改修をして、住み易い共用空間を作っており、利用者にも好評である。リビングルームから中庭を眺めて外の気配を感じる事が出来る。</p> <p>2、全体的に見て…：「大きな木の天井、綺麗でしょ。この天井見たら気持ち良いのよね。ええ所に来ました。有難い、有難いならイモムシャクジラだわ、Aさんは木の温もり溢れるホームの造りを、こよなく愛している。開設して13年を経たホームでは、風呂場の改修を予定している。重度化する利用者の為にリフトを導入するか否かを、全職員で話し合う。実際にリフトに乗ってみて「足が地につかないのは怖い。自分が荷物みたいで見世物になってる気がする」リフトが悪いと言う訳ではないが、人に人として接したい。利用者の気持ちになって、熱い討論を交わしている。</p>		

III ケアサービス

番号	項目	できている	要改善
6	介護計画への入居者・家族の意見の反映		
7	個別の記録		
8	確実な申し送り・情報伝達		
9	チームケアのための会議		
10	入居者一人ひとりの尊重		
11	職員の穏やかな態度と入居者が感情表現できる働きかけ		
12	入居者のペースの尊重		
13	入居者の自己決定や希望の表出への支援		
14	一人のできることに配慮		
15	入居者一人ひとりに合わせた調理方法・盛り付けの工夫		
16	食事を楽しむことのできる支援		
17	排泄パターンに応じた個別の排泄支援		

III ケアサービス(つづき)

番号	項目	できている	要改善
18	排泄時の不安や羞恥心等への配慮		
19	入居者一人ひとりの入浴可否の見極めと希望にあわせた入浴支援		
20	プライドを大切にした整容の支援		
21	安眠の支援		
22	金銭管理と買い物の支援		
23	認知症の人の受診に理解と配慮のある医療機関、入院受け入れ医療機関の確保		
24	身体機能の維持		
25	トラブルへの対応		
26	口腔内の清潔保持		
27	身体状態の変化や異常の早期発見・対応		
28	服薬の支援		
29	ホームに閉じこもらない生活の支援		
30	家族の訪問支援		
記述項目	一人ひとりの力と経験の尊重やプライバシー保護のため取り組んでいるものは何か		
記述回答	<p>1、自主評価について…：ケアマネージメントで改善しなければならない項目はないが、敢えて課題を聞くと、利用者の思いをもっと聞いて、日頃行けない所へ連れて行ってあげたいという気持ちを語ってくれた。</p> <p>2、全体的に見て…：帰宅願望が強くなり、5分おきに「家へ帰るんじゃ」と訴え出した人がいた。我慢していたものが出たのかも知れない、今が向き合う時なのかも知れないと、職員達は自宅に帰っても空耳が聞こえるほどじっくり付き合った。その人の気持ちになっての関わりで、次第に落ち着きを取り戻した。日中は布パンツで夜間紙パンツの人が、毎朝失禁するようになった。この人は寒がりだから、部屋が寒くてトイレへ行かなかったのではないかと考え、室内を暖かくしてトイレの戸を少し開けて行き易くしたら改善した。その人の事をよく知り、その人の身になっての対応で、よくなった事例は多い。</p>		

IV 運営体制

番号	項目	できている	要改善
31	責任者の協働と職員の意見の反映		
32	災害対策		
33	家族の意見や要望を引き出す働きかけ		
34	家族への日常の様子に関する情報提供		
35	運営推進会議を活かした取組		
36	地域との連携と交流促進		
37	ホーム機能の地域への還元		
記述項目	サービスの質の向上に向け、日頃から、また、問題発生を契機として、努力しているものは何か		
記述回答	<p>1、自主評価について…：運営推進会議をこの1年間で1回しか開催していない。周辺に住宅がないという地理的条件もあるが、ホームを理解して貰ったり、幅広い委員からもっと地域との交流の機会を作って貰える様、協力が得られると良い。</p> <p>2、全体的に見て…：ホームは家族との関係をとても大切に考え、家族とのやり取りを詳細に記録し、全職員で共有している。今まで多くのホームを訪問したが、これだけの記録は他に類を見ない。電話で話す時も、声のトーンや間に気を付けて、家族の気持ちを判るうと努め、理解して貰える様、専門用語は使わない様、心掛けています。相手の気持ちを察しながら、言葉を選び自分の気持ちを伝える、気持ちを大切にしたい一本筋の通った姿勢は全てに共通していて、全くぶれがない。そんなホームを市と認知症専門医療法人が全面的にバックアップしている。“炉端の家はこう考える”の在り方は、後に続くグループホームの指標となっている。</p>		